

中 西 功 著

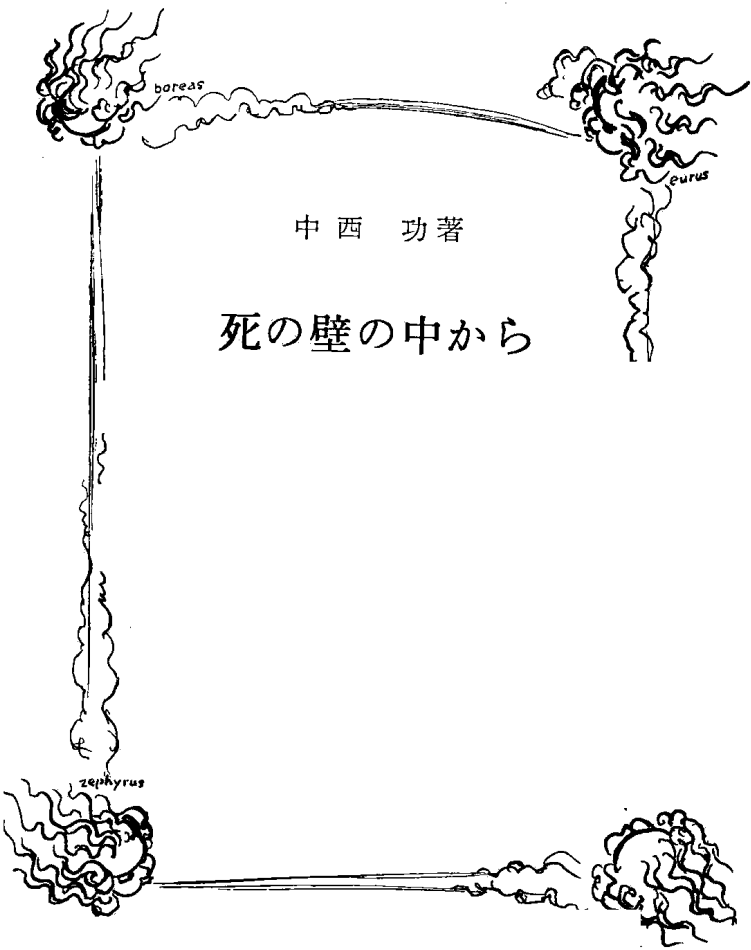
死の壁の中から

— 妻 へ の 手 紙 —



岩 波 新 書

787



中西 功著

死の壁の中から

中西 功

1910年三重県に生まれる
1932年上海東亜同文書院中退
1947-50年参議院議員
専門—中国問題・政治評論
著書—「民主主義日本の道標」
「中国革命と毛沢東思想」他

死の壁の中から

岩波新書(青版) 787

1971年5月31日 第1刷発行 ©



著 者 なか にし こう
 中 西 功

東京都千代田区一ツ橋2-5-5

発行者 岩 波 雄 二 郎

長 野 市 中 御 所 2 - 3 0

印刷者 田 中 忠

発 行 所 東京都千代田区 株式 岩 波 書 店
 一ツ橋 2-5-5 会社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

大日本法令 印刷・製本

目次

I	この手紙を世に出すにあたって	一
II	死の壁の中から	五
	―妻への手紙―	
1	強く生きるために	五
2	どん底での公判	一三
3	八・一五以後	二〇
付録	資料	二二
あとがき		二三

I この手紙を世に出すにあたって



獄中から出した当時の手紙

埃にうもれ
て三十年

この手紙は私が巢鴨の東京拘置所に拘留されていた戦争末期に家族あてに出したものです。一九四二年六月に上海で検挙されて東京に連行され、警視庁で取り調べられたあと、その年の暮に起訴され、東京拘置所に移され、予審と公判にまわされた私は、そのあいだずっと家族（妻子や兄弟や父）あてにたくさんの手紙を書きました。それらは終戦後しばらくは完全に残っていたのですが、もう三十年ちかいあいだ私の家の片すみで埃に埋もれて、鼠や虫に食われたり、引っ越しの度に紛失したりして、前半のものはすっかりなくなり、後半の一九四四年、四五年の、それもほとんど妻や子供あてのものだけが残っていました。それも完全とはいえません。

私は元来、「前ばかり見て歩く人間で」、自分の過去についてはあまり考えようとしなかったのですが、この数年来、自分の歩んできた道を考えて見る気持ちになり、過去の思い出などを書いたり、書斎のなかの古い資料をさがしているうちに、残っていたこの手紙を発見しました。それを見た私の第一印象は、「俺はあの当時の方が字がうまかったのだなあ」というおどろきでしたが、あるいはこれは字だけではないかも知れません。それはともかく、それらを読んでみますと、やはり昔の獄中のことどもがいろいろと思ひ出されます。

もちろん、なかから出す手紙には限界があり、もっぱら家族にあてて出したものですから、当時の生活の一側面しか出ておらず、事件そのものや当然もっとも切実な関心事であった当時

の政治や獄内活動については述べていません。この手紙のなかには、いろいろのかくされたニエアンスがあるのだと思うのですが、すでにながい歳月がたっており、世の中の情勢も大きく変わっているので、当時のままのはりつめた気持ちをいま復元し補足することは十分にできません。しかし、当事者としていくらかはより知っていますので、これを読まれる皆様の御参考までにいくつかの補足をしておきたいと思います。

一九三〇
年の上海

私はなぜ捕えられて拘置されたのか？ 私は何も特別なことをしたわけではありません。せん。現在日本のすみずみで、日夜、平和のために、民主主義のために、自からの階級の解放のために活動している人が無数にいます。私は一市井人としてそうした当り前のことを、しかも、より低い段階で行なっただけです。しかし、昔の帝国主義者はそれさえ許さず、極刑をもって禁圧しました。だから私たちはその弾圧ともたたかわねばならなかったわけです。

私は一九一〇年九月十八日(明治四十三年)に三重県多気郡西外城田村土羽(いまの多気町)に小地主の次男として生れ、宇治山田中学校(いまの伊勢市の)を卒業したあと、一九二九年四月(十八歳のとき)に三重県の県費生として、近衛文麿が院長をしていた上海の東亜同文書院に行きました。感受性の豊かな学生として、そこで日本帝国主義の対中国侵略の実際を見、その帝国主義的な学校を根本的に改革しようとする学生運動に参加しました。また私は、「国際都市」上海のほとんどまで腐敗した一面と、その奥底から立ち上り、あらゆる帝国主義、国内の封建勢力、

買弁的な資本主義に反対して、民族の独立と自からの社会的解放のためにたたかっている中国人民やそれを取りまく国際的人士の姿を目の前に見て、私の一生の方向をきめました。

一九三〇年に私たち学生（およそ六〇〇人）は学生自治会に結集して学校の民主化、学生生活の改善、教授内容の刷新を要求して半年以上も交渉し、ついに全校のストライキをおこない、その要求の多くを獲得しました。この私たちのたたかいは中国の学生組織をはじめとする中国の進歩勢力だけでなく、上海の日本人の良心的な人びとの同感と熱烈な支持をうけました。このとき上海には主として日本人兵士にたいする反戦反侵略の宣伝を目的にした「日支闘争同盟」という闘争団体ができていましたし、尾崎秀実のような良心的なジャーナリストが新聞通信関係にはたくさんいました。

実は、この一九三〇年の秋に、相ついで上海市中に「日支闘争同盟」（西里竜夫が責任的指導者）ができ、東亜同文書院のなかに中国共産主義青年同盟（実際は中国共産党と同じもの）の細胞組織ができ、尾崎秀実らと当時はコミンテルン関係と理解されていたゾルゲやスメドレーなどの連絡ができたのですが、それらは人的にも入りまじっており、ほとんど一体のものでした。そして、それらには大きな歴史的意義がありました。

この当時、上海在住の三万をこえる日本人のなかには、もちろん帝国主義的な考え方の人が支配的でしたが、まじめに中国民族との友好とアジアの繁栄を考えていた人びとは少なくはなく、むしろひじょうに多かったといえます。そのなかには、一九一〇年代の孫文の革命闘争と

の交流の伝統をつぐ古い型の「中国通」の傾向をもつ人びと、吉野作造に代表される大正デモクラシーの影響のもとで中国の近代化に同情をよせる人びと、実際に一九二〇年代の中国の国民革命に参加した田中忠夫や鈴江言一のような人びと、中国社会に入りきり、とにかく中国が無上に好きだという有名な内山書店の主人でクリスチャンの内山完造のような傾向の人びとなど、日中交渉史のそれぞれの時代を代表するような人びとがたくさんいました。

ところで、上海にあったこれら良心的な日本人は一九二七、八年を転機に重大な試練に際会しました。それは一つは一九二七年に民族資本の主力である蔣介石国民党が国民革命を裏切り、帝国主義や封建軍閥と妥協し、革命を一時挫折させ、完全独立と社会進歩をめざす中国革命は主として労働者・農民、中国共産党によってしか発展させられないという事態が生れていたためであり、いま一つには、この中国革命の一次的よわまりを利用して当時から日本帝国主義者が決定的な対中国武力侵略を決意し、準備し、実行に着手していたからです。そこで本日に日中両国人民の友好と繁栄を求めるといふ善意を生かすためには、どんな立場で、どんな認識で、誰とともにたたかうか、ということが切実な問題になりました。

いうまでもないことです。が、侵略と友好とは両立しません。真実の友好のためには、まず日本の戦争と侵略の政策に決然と反対する立場が必要であつたわけです。その立場のちがいによつて中国認識もことなつていました。では、当時日本にはどんな立場があつたのか。大きく見て四つの立場がありました。その第一は、軍部や地主や独占資本の一部を中心とする兇暴な軍

国主義の立場で、当時は「積極外交」の名で活動していました。この連中の対中国認識は、いわゆる「半植民地・半封建社会」のおくれた一面だけを見、中国は度し難くおくれ、列国に依存する以外に生きる道はなく、列国の分割や、封建的な軍閥割拠や古来の礼教(孔孟の教え)はその適当な政治的表現であり、無知と迷信と貧困と軍閥的圧政は中国人の宿命であり、中国の統一などどこにもない、というものでした。これを理論化したり、美化してきたのが、いわゆる「シナ学」ですが、これが日本の帝国主義者の主たる中国観でした。しかも大切なことは、この中国観とかれらの「神国日本」という神がかりな日本観とが思想的內容においてまったく同じものであったことです。むしろ、それは「神国日本」や自からの軍国主義から生れた中国観であったといえます。「蟹は自分の甲羅に似せて穴を掘る」といいますが、人は自分の立場や利益や必要をはなれて物を見ることはできません。それはもっとも兇暴な帝国主義者の中国観であり、かれらはそれを国民のあいだにつよく浸透させていました。しかし、思想的にはあまりにも貧弱で、現実からも遊離しており、思想的影響力としては当時は日に日によわまっています。

第二はいわゆる「協調外交」の立場で、前者と同じ目的を追求しているが、経済侵略により重点をおき、米英帝国主義ともある程度協調し、南京国民政府を一応中央政府としてみとめ、それを通じて日本の圧倒的な支配力をつくりあげようとするものでした。これは直接には一九二七年いらい発足した英米の新中国政策に一部同調しようとするものでしたが、一つは二〇年

代の中国の国民革命の圧力の反映でもありました。それと前者との内部的対立ははげしかったので、その対立面を利用することは必要でしたが、しかし、それはやはり帝国主義の立場であり、反革命化した蒋介石国民党がいつそう反民族的・反人民的に傾斜し、日本に従属することを前提にしており、前者と根は同一であり、相互補完的な関係にもありました。したがってそれらの対中国認識には中国の民族資本主義や開化した地主を中心とする「近代化」の側面や国民政府の統一的側面を見ようとする一つの新しさがありませんでしたが、その「近代化」は実質的には列国資本に育成され、それに従属した「舶来化」であり、前者の古い中国論とからみ合っており、実際はその古い中国論を土台にしていました。

以上が日本の支配層の二つの立場ですが、それらに反対して日本国民のあいだには、中国の政府の主人が誰であろうと、中国の政治経済体制のいかんにかかわらず、それに干渉せず、日本は中国民族や中国政府と平和的な共存共栄関係を維持し、発展させて行かねばならぬという立場や考え方がありました。しかし、そのなかに二つの傾向があったわけです。その一つはブルジョア民主主義や一般的な平和主義の傾向で、中国認識としては一般的に中国の近代化を支持していましたが、帝国主義の支配のもとでも、中国の民族資本主義の発展が「必然的」にすすみ、中国民族の解放と統一の担い手は中国の民族資本主義や国民党だと考えていました。したがってそれには二つの大きな弱点がありました。第一は、それは反帝国主義の観点がよく、その善意にもかかわらず、前述の第二の方向に追従したり、それによって利用される可能性が

あることであり、第二は、当時中国の民族資本主義の主流は帝国主義や封建軍閥と妥協し、植民地化の手先きになっており、民族解放と進歩の担い手ではないことでした。この傾向を第三の立場としますと、この立場はムードとしてはひろくあったとしても、とくに一九二七年以後は独自の政治力とはなりえず、分解の運命につきあたっていました。

いま一つの傾向、つまり第四の立場は帝国主義の戦争と侵略に明確に反対するとともに、中国認識では中国の人民と中国共産党が中国の民族解放と進歩の主力であり、それが歴史の必然であると考えていました。それが日本国内においてはげんげしい弾圧に抗して、平和と民主主義と社会進歩のためにたたかっている民主主義・社会主義の勢力の立場であり、それを支える思想はマルクス主義・共産主義でした。そして、この勢力がつよくなれば、前述の第三の立場の人びとも氣力をとりもどし、さらに第二の立場の善意の人びとをもまき込んで、それらを反戦反軍の統一戦線に合流させていく可能性をもっていました。それが当時の日中両国人民の共闘の日本側の主体でした。

もちろん、日中の労働運動や反戦運動の交流は、一九二五年の上海の五・三〇闘争のときから緊密でした。日本の労働組合代表団が上海を訪問して五・三〇闘争を激励しており、片山潜もこの上海にかけつけています。徳田球一などもこの当時上海を訪問しています。そしてそのあと日本では日本政府の対中国革命干渉に反対して、「中国から手を引け」をスローガンにした「対支非干渉同盟」が当時の民主主義・社会主義勢力を網羅してつくられ、活発に活動しまし

た。これは当時としては特筆される日本人民の反戦運動であり、一つの統一戦線運動でありました。そしてこの当時から、日本では新しい中国、人民の中国、革命の中国についての紹介がはじまり、科学的な中国研究が第一の「チャンコロ」的中国論に抗して行われるようになります。

しかし、一九二七、八年いごは、その第四の道が中核にならなければ真実の日中友好はたたかいとれないという事情がきわめてはつきりし、上海の日本人のなかでも「ふんわかムード」が許されなくなり、一部は侵略主義に屈服し、他方には新しい真実の反戦と日中友好の力の結集体が生れたのです。一九三〇年はわれわれにとってこのような歴史的な年でした。

もちろん、この道はきびしい道でした。その三〇年の暮、日本総領事館警察は**上海事変下の反戦闘争**「日支闘争同盟」が日本海軍の練習艦隊の士官候補生に手渡した反戦ビラの事件をきっかけに、われわれ同文書院をおそい、三十余名を検挙しました。私もそのなかに入っており、それが私のうけた第一回目の検挙でした。

この弾圧によって「日支闘争同盟」はつぶれましたが、しかし、われわれ書院の共青組織はかえっていっそう発展しました。私もその一員でした。その活動には三つの分野がありました。学内での運動（これには中国研究も含まれる）が基本でしたが、その外に上海の市民にたいして宣伝ビラを撒布したり、上海市民のデモなどに参加する活動もあり、「外国兵士委員会」の外国兵士にたいする工作に参加する活動もありました。この「外国兵士委員会」というのは、中国共

産党が世話役になり、日本・朝鮮・ベトナム・インド・フランス・イギリス・アメリカなどの反戦主義者・共産主義者がそれぞれの部にわかれて結集し、上海に駐留する自国の軍隊に働きかける組織でした。当時、上海には日本の労働組合の一部も参加した、太平洋労働組合書記局をはじめ、いろいろの国際組織があったのですが、この「外国兵士委員会」も一つの国際組織で、アジアおよび世界の反戦・反侵略主義者の一つの結集体でした。

このなかでベトナム（フランス）の人びとの活動はもっともすばらしいものでした。兵士が主としてベトナム人であった上海のフランス軍の軍艦は一九三一年のメーデーには色刷りのビラで真赤になったといわれていました。私は最近になって当時ホー・チミンが上海にいたことを知りましたが、ベトナムの人びとは早くからりっぱでした。日本人部の活動をそれと比較することは無理ですが、でも重要性から見て、それは高く評価されていたようです。

しかし、とうとう「九・一八」（一九三一年の満州事変）がおこり、翌年の一月二十八日にはそれは上海に拡大しました。この時期が私たちがもっとも精力的に活動した時期でした。学内では、戦争のために日本の円が下落し、食糧事情がひどく悪化したのに反対して第二のストライキを準備していました。また上海市民の抗日闘争にも朝鮮の同志らとともに参加しました。そして日本軍が「上海事変」をはじめたときには、当初は日本軍の義勇隊の派遣要請に応じて戦場に出かけ（私も）、つぶさにその侵略戦争の実体を見聞し、調査し、それを全学友に伝えました。そして、この戦争についての全校の討議を組織し、ついに戦争協力を拒否し、内地に総引揚げ

することに意思を統一し、幸い良識的であった学校当局をまきこんで、その要求を貫徹しました。これは、まだ陸軍が到着せず、十九路軍や上海市民に包囲され、恐慌状態にあった上海の日本人社会には大きなショックでした。彼らは若い盛りの私たちの引揚げに狂気のように反対しました。私はこのたたかいは、当時の日本の反戦闘争のなかでも戦場のちかくで、もっとも組織的に公然と行われた特筆されてよい一つの闘争だと今でも考えています。

私の手紙のなかに出てくる西里竜夫・浜津良勝・新庄憲光・河村好雄は、すべてこのときからの書院の同志でした。そこには名前は出てきませんが、尾崎庄太郎・白井行幸も、またゾルゲ・尾崎事件に連坐した水野成もやはりこのときからの書院の同志でした。

上海を引き揚げたあと、私は東京に直行し、「プロレタリア科学研究所」の「中国問題研究会」に参加し、科学的な中国認識の普及に従事しました。このとき、日本の反戦運動はひじょうに重大な段階にあったのだと思います。しかし、一九三

二年四月に私は尾崎庄太郎らとともに一斉に検挙されてしまいました。これは私のうけた二回目の検挙でした。五・一五事件のおきたあと、私は釈放され、三重県の郷里に帰りました。そしてそこに腰をすえて弟たちとともに組織活動をはじめました。弟たちの学校（蚕糸学校や農学校）や瓦職人組合や村の青年学校のなかに組織をつくりましたが、これは私の村としては破天荒のことでした。この人びとのことについてはあとでふれます。

私は三三年に尾崎秀実の要請で大阪に出、大原社会問題研究所で働き、さらに東京に行き、

三四年に満鉄本社 of 調査關係に就職をして大連に行きました。私はこの間、日本でいろいろのことを学びました。当時、日本国内の反戦運動や革命運動は重大な転換期に際会していました。日本共産党は潰滅状態にあり、大量の転向状況もありました。しかし、私はそれらを敗北的には見ませんでした。むしろ、それをわれわれの馬車馬のように駆けてきたいままでの活動にたいする重大な反省の材料としてうけとり、これからは本当に人間性をきたえ、みんなのなかにとけこみ、どんな人ともよい友人になれるような人間になり、第一歩からやり直そうと考えました。私はこのとき、ヤロフラフスキーの『人間レーニン』やクルプスカヤの『レーニンの思い出』を読んでそこにいま自分が求めているものを発見したように思われ、深い感銘をうけました。そして志は大きくもつとともに、足をしっかりと大地につけて、情勢をよく分析し、自分で考え、自分に責任をもち、為すべきことを一步一步、時間をかけてみんなとともにやって行こうと考えていました。大連港に着いたときには、近代化された大埠頭をみながら、この汚れた帝国主義的支配を必ず打破してやると決意していました。私はこのとき生涯でいちばん革命的に高揚していたのかも知れません。そのことはこの手紙のなかでも述べています。このとき私は二十三、四歳でした。

満鉄の『満鉄調査月報』の編集部に所属して仕事をはじめた私は、とたんに二つの大きな事件にぶつかりました。その一つは「依蘭農民暴動」、他の一つは日本人警官のストライキでした。いずれも日本の内地では見られないものです。前者は北満の依蘭県を中心とする六県の農

民が日本軍の不当な土地買収（収奪）に反対し、その一帯の顔役（地主）の謝文東を頭にして一斉に蜂起したもので、日本側は連隊長が殺されるという被害をうけました。実はこの暴動は地主や旧軍閥の一部さえまきこんで、日本帝国主義の侵略とたたかう全民族的な統一戦線が可能であることをよく示したものでした。その農民軍はそのまま東北抗日連軍の第六軍に成長していきしました。

後者の日本人警察官のストライキはいわゆる「在満機構改革」に反対したもののだが、満州の日本政府の全機構を関東軍の一元的な支配下におこうとする軍の方針に反対して関東州（大連・金州・普蘭店を結ぶ一帯）の日本人警官がおこなったものです。ことは上層部の内部対立にすぎなくとも、そのたたかいがこのように大衆的になりますと少し意味がちがってきます。この前年にはもつと大規模に満鉄社員会（本社、鉄道、撫順炭坑をふくめ五万人内外）が結束して、関東軍の満鉄解体方針に反対して大々的な運動を展開し、部分的にその要求を通しました。この反軍的な雰囲気はまだ満鉄内のあちこちにはつきり残っていました。私は東京にいますとき、満州の中国人労働者の闘争や日本人労働者の動向についてはくわしく調査して論文にまとめて雑誌『東亜』に発表しておいたのですが、満州の日本人を一概に「帝国主義の手先」とか「労働貴族」と見ることが大きな誤りで、満州におけるわれわれの活動には大きな展望があることを具体的に知ることができました。